

ダムによる水質の変化は現地を見ればわかります

この度配布された「水質シミュレーション」資料がどのような基準でなされたのかわかりませんが、実際にダム建設地に行けば自然環境が多大な打撃を被っていることは一目瞭然です。



早池峰ダム（右写真）では建設からわずか5年で異変が起きています。

石に沈殿物が付着し、川らしい清潔感は全く感じられません。この沈殿物は石の隙間に生息する生きものの住みかを塞ぎ、それらが担っていた水の浄化作用を減退させます。

この川底の石の滑りはダムから 20km 下流にある大迫町まで続いています。



四十四田ダムでは増水時のヘドロが流口付近の河岸に付着し、悲惨な情景です。自然の川でこのような汚れた岸辺を見ることがありますか？



御所ダム（左写真）では貯水池の水が富栄養化のため緑がっています。

築川ダムを造れば、これまできれいな川の水を取水していた沢田浄水場もこの緑色の水を浄水することになり、新たな浄水コストがかかるでしょう。

ダムからの水道水が消毒臭くなることは全国各地で起きており、塩素殺菌の過程で生成されるトリハロメタンなど、利用者の健康にも影響が及ぶという調査報告があります。

型どりの水質検査だけでは影響を把握できません

ダムがもたらす沈殿物は河床などに付着し継続的な影響を与えます。沈殿物が沈んだ上澄みだけで検査したからといって、十分な将来予測ができるはずなどありません。今回配布資料の水質シミュレーションは狭視的な判断です。

ダムの現実から見たシミュレーションは

早池峰ダム（５年後）魚が激減する 綱取ダム（２０年後）貯水が緑がかり従来の魚はほとんどいなくなる 四十四田ダム（３５年後）堆砂容量が満杯になり対策が必要になる 石淵ダム（５０年後）ダムが機能なくなり新たなダム（胆沢ダム）が必要になる。

むしろこのほうが可能性のある予測とはいえないでしょうか。

水さえ貯めなければ水質の低下は幾分防げます

築川ダムを超える不特定容量がある早池峰ダムや綱取ダムなどでは、放流した稚魚も生育せず「水流の正常な維持機能」が役に立っていない状況です。

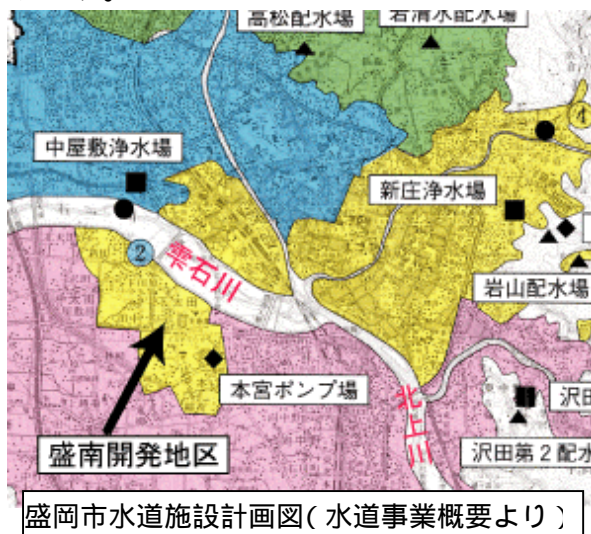
この不特定容量分と盛岡市と矢巾町のわずかな予定取水分 5,000m³/日が無くなれば、ダムに水を貯める必要はなくなります。

築川ダムの水は需要があるの？

住民基本台帳に見る盛岡市の人口は平成 11 年をピークに年々減少しています。

ダムが完成し取水が可能になるとしても、早くて平成 28 年なので、それまでに水道使用量はなおいっそう低下する可能性があります。

また、稼働率が高いとされる沢田浄水場エリア（ピンク）には新庄からの給水が計画されダム計画よりも早期に実現する予定です。



昨年の築川ダム取水事業再評価で事業継続の答申がでたことを理由に、取水事業の検討は当懇談会の義務ではないといいますが、実際には築川ダム取水の需要の無さは日増しに明確になっているといえます。

取水事業についても踏み込んだ討議が必要です。

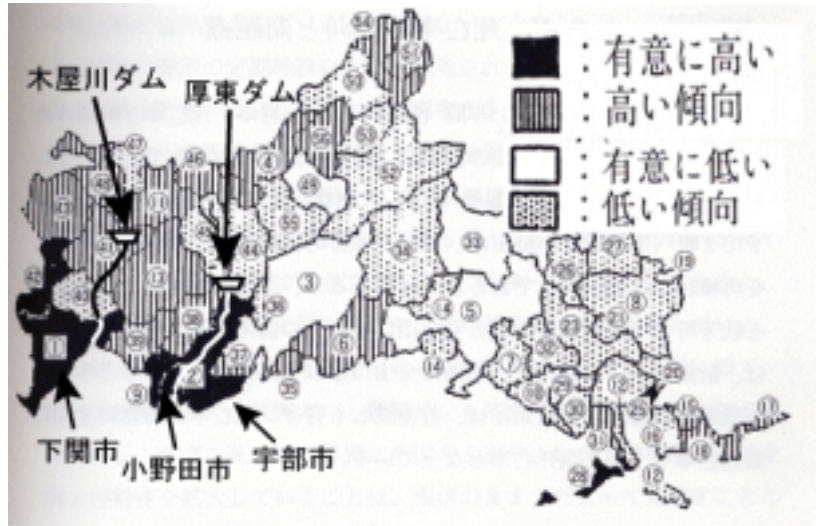
付け替え道路完成までまだ5年かかります（平成 22 年竣工予定）

昨年、道路事業に就いた費用はわずかに 1 億円。予定どおりに工事が進むかどうかさえ疑問です。今後、財政状況が悪化した場合は、もう一度整備計画を見直すべきです。

《参考》ダムの水で胃ガン死亡率が増加！山口県の例

(野瀬善勝 元山口大学医学部教授著「エコロジカルな地域づくり」より転出)

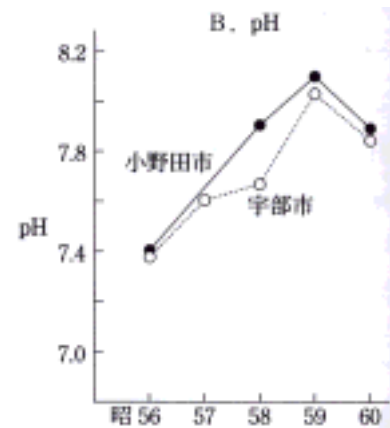
(要旨)最近 20 年間の「山口県市町村別の胃ガン死亡率の地理的分布」は、瀬戸内海沿岸地帯と西部臨海沿岸地帯に集積しており、これは厚東ダム(宇部市・小野田市)と木屋川ダム(下関市)からの水道水供給区域に符合する。



宇部・小野田両市のガン死亡率が高いのは偶然ではなく、飲料水質とガン発症との間に何らかの関連性があると推論される。

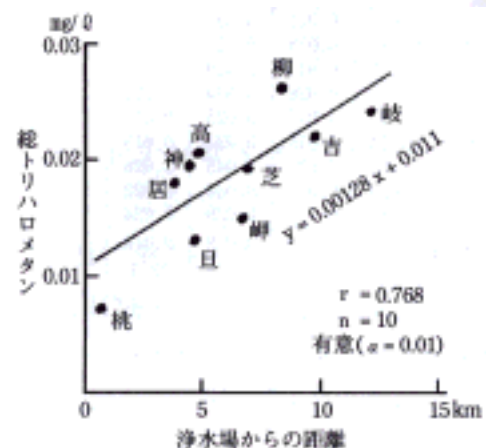
飲料水の発ガン性で主役を演ずるものはトリハロメタン (THM) であり、「アンモニア性窒素」濃度の 10 数倍の塩素が、上水処理のために使用されることによって生成される。

昭和 56 年度以降、昭和 60 年度まで 5 カ年間、宇部・小野田両市の飲料水のトリハロメタン濃度は、逐年高まってきた。水道水の処理方法を改善したことで、一時的にトリハロメタンの濃度がやや減じたが、その後ダム湖の水質汚濁の進行に伴い、再びトリハロメタンの濃度が高まっている。(右表上は両市におけるトリハロメタン濃度の年次推移)



また、両市とも浄水場から距離が遠ざかるに従い、塩素注入後の時間の経過と共に濃度が高まっている。

これは、浄水場から距離が遠ざかるに従い pH 値が高まり、それに従い遊離残留塩素が減じ、さらに残留塩素の減少がトリハロメタンの濃度を高めることによる。(右表下は宇部市における浄水場からの距離と上水中のトリハロメタン濃度との関係)



このことは、たとえ浄水場内で安全な水道水を生成したところで、配水の過程で有害物質が生じることを意味する。

築川ダム地元説明会傍聴報告

築川流域を6箇所に分けて行われた地元説明会ですが、あまりに参加者が少なく、これでは「説明責任は果たした」という既成事実を作るためだけに行われたとしか思われません。会の内容と参加者からの質問を概略して述べます。

第1回説明会 傍聴せず。新聞報道では参加人数14名

第2回説明会（8月29日中野地区活動センター）参加人数20名程

- ・下流左岸堤防に関し、超過洪水の際には「部分的にそういう構造物が壊れることが絶対ないとはいえない」と説明。
- ・付け替え道路側の杉林は土砂災害を誘発するとの意見に対し、「県にはそれに対応するだけの経費がないので、地権者の自主的な判断に委ねたい」と回答。

第3回説明会（8月31日 築川ダム建設事務所）参加人数20名程

- ・「沢に鉄砲水みたいなのが流れて沢が決壊、あるいは山手の斜面が崩れるとか、そういうものまではこのダムでは防げません。」という説明があった。

第4回説明会（9月26日築川地区振興センター）参加人数15名程

- ・ダムに関する説明はビデオ放映のみで、付け替え道路の説明に終始した。
- ・参加者から「ダムの堤防を魚が上がれるように魚道を造ると言っていたのは嘘だったのか」の発言。
- ・ダム規模縮小による買収残土の処分については「ワークショップ等を開くなど、地元の人々の意見を聞きまして、残地の処分を検討しているところです。」と説明があったが、具体的に何時どこで検討するかは明言せず。

第5回（9月27日根田茂地区消防コミュニティーセンター）参加人数5名

- ・築川道路事業の進捗率が再評価調書では82%になっているが、地元には国道77%、県道39%と説明。場所によって説明が違うのはなぜか？
- ・「106号と県道の交差点に産直広場を造ると言っていたが、どのくらいの広さになるのか。」には「検討中ですのでどのような形になるかはまだ決まっておりません。」と回答。これも具体的なものは示さず。
- ・地元参加者の承諾を得て一般傍聴者が「今後の話し合い次第ではダム堤はまだ下がることになるのでは。」と質問したが、「わかりません」と一蹴し、即座に説明会を取りやめてしまった。閉会后「地元ではわからないことを代わって質問してもらったのになんという態度だ」と地元参加者はあきれていた。

第6回説明会（9月29日川目上学習センター）参加人数8名

- ・道路建設の一部を国の分担にしたことによる計画変更が地元住民に十分伝わっていなかった。そのため、「築川ダムには協力できない」と言う発言があった。
- ・「参加人数が少ないのはなぜだと思うか？」の質問に「ダム事業に賛成する住民が多く、説明を受ける必要がないと判断したためでは。」と回答。それに対し「ダムの説明なんて聞きたくないと言う人が多いからだ」という意見があった。